

『海道記』と『観心略要集』

——『和漢朗詠集』古注との対照を兼ねて——

羌 国 華

一 はじめに

『海道記』は貞応二年頃の成立であり、『観心略要集』（以下『略要集』と略称する）は十一世紀の初め、源信僧都（九四二—一〇一七）によるものとされていた。⁽¹⁾しかし、私は承暦元年（二〇七七）の成立とする最近の西村岡紹、末本文美土両氏の主張に従うことにしたい。小論は、従来『海道記』との部分的な影響関係が指摘されていた『略要集』に注目して、『海道記』の成立に際して『略要集』が果たしていた役割を明らかにするものである。

『海道記』は、三部構成となっている。即ち第一部は序文、第二部は紀行、第三部は仏者としての述懐という具合である。構文の仕組みと表現について見ると、第二部の紀行と、第三部の仏者としての求道の叙述が一つに統合されていることが特色になっている。しかし、第二部と第三部はどういう関係にあるのか、言い換えると、第二部の紀行と、第三部の仏者としての求道の叙述の目的は何であるのか、また第二部と第三部とはどちらが先に書か

れたのか、というような問題についてはまだ決定的な解釈は与えられていない。特に『海道記』の作者の執筆動機については、先学の関心は次の述懐における「境」と「景趣」に集中されていた。

仍三十一字ヲ綴テ、千思万憶①旅ノ志ヲ演ツ。此ハコレ、文ヲ用テサキトセズ、誦ヲ以テ本トセズ、只②境ニ牽レテ物ノ哀ヲ記スルノミ也。外見ノ処ニ③其嘲ヲユルセ

（新日本古典文学大系『中世日記紀行集』七六頁）

④抑此ハ竊中ノ景趣ニアラズ、存外ノ浅キ誑言ナリ。然而魚ニアラザレバ魚ノ心ヲ知ベカラズ、⑤我ニ非ハ我志ヲ悟ルベカラズ。……コレ、タゞ家ヲ出シ始メ道ニ入シ時、身ノ哀ニ催サレテ、⑥人ノ嘲ヲ顧ミズ、愚懷ノ為ニ此ヲ記ス。他興ノ為ニ是ヲ書カズ。嘲ラン人憐マン人、⑦順逆ノ二縁共ニ一仏土ニ生テ、一切衆生ヲ済ヘト也（同書二二—二四頁）

右の文面から以下のように読み取れると思う。④の竊中の景趣を挙げる作者の真意は、①の旅の志を述べることにあり、竊中の景趣に引かれたのは、②の「境」による物の哀れを記すためであ

る。拙い狂言ではあるが、③と⑥のように、人の嘲りを顧みないのは、「愚懷」である⑤「我志」を述べ、⑦順逆の二縁に巡り合
い、一切衆生を救うためである。

二 従来の研究

『海道記』についての研究は、近年、目覚ましいものがある。^④ その中で私が注目しているのは、仏教の視点からなされた『略要集』との関連についての指摘である。これについては、西村岡紹氏らによる『略要集』は源信僧都の作ではないとする新説が出ていて、私もその立場を取るものである。私の調査によると、『略要集』の『海道記』への影響は、語句の表現のレベルに止まらず『海道記』の作者の無常観をはじめ、仏教観、及び構文姿勢という深層にまで及んでいる。例えば、語句についての関連は、今まで指摘された箇所以上に、『海道記』全体に行き渡っているし、仏教的理念についてみると、『海道記』の作者は『略要集』の「触事」と「増観」の思想を受け継いでいるように思われる。又、

漢詩文に關して見ると、これまでも『和漢朗詠集』との關係が多く指摘されていたが、古典大系本の『和漢朗詠集』所載の漢詩句そのものとの關係の指摘が多かつた傾向がある。しかし、『海道記』と『和漢朗詠集假名注』（以下「古注」と略稱する）等書陵部本系の朗詠注との同じ表現、又は類似表現が極めて多いことに注目すると、『海道記』の作者は『和漢朗詠集』そのものよりも、『古注』により親しみ、その作者と同じ教養圈の中にあつたらしいことが十分に考えられるのである。

小説冒頭の「境」と「景趣」に関する『海道記』の文面を解釈し、作者の動機を読みとるには、『略要集』の末文（第十）にある次のくだりに対する分析は欠かせないと思う。

b 触事可增境也。……翠嶺風扇無妨欣寶樹之微風。c 何乍得
所觀境。徒不運心念乎。……念々歩々悉改三途之業。造次顛
沛。併成九品之因。

d 問。今以愚驚性集此文。豈無後見之嘲乎。 e 答。有二故。

(1) 為練自心也。釈云。常為心師。不為心師。……自心若正。万境咸歸。自心若邪。諸塵有滯。……而心不孤起。必託於緣。假文助意。觀心不乱。既調散心於一境。必遂往生於三輩。(2) 為誘他人也。挑長夜之法灯。適叶祖師之本懷。伝苦海之船筏。遍報釈尊之恩徳。……

故不憚短才淺智。為不成斷種身也。……若義理有紕繆。f 賢哲必加添削。於衆嘲者敢不辭之。逆順具結縁。互欲蒙引導。

『大日本仏教全書』三十一卷一八二—一八三頁。以下『仏全』と略称。

右の文は三つの内容からなっていると思う。第一は、『略要集』の編者のaの無常観と、無常の世に対する世渡りの方法である。人生は儚く、その限られた人生の世渡りの方法として、bの「誠を励まし、事に触れて観を増」し、cの所観の境を得ながら、心念を運ばなければならない。『略要集』の「事に触れ、観を増し、所観の境を得ながら、心念を運ぶ」の意味は善悪の業因によって必ず到るべきさまざまな境界や、色々な差別的な現象に触れ、智恵でもって対象となるこれらの現象を子細に観察し、心の本質を見極め、正しい知識を得るということになる。

この文の第二の内容はdとeの編集目的である。その動機は二つで、一つは「自心を練」ることによって「往生を三輩に遂」げることであり、もう一つは他人を仏道に誘うことである。

『観心略要集』

『和漢朗詠集仮名注』

1…情願過去年月之如夢。亦知未來時節

第三の内容は『略要集』を書いた作者の心情の披露である。「断種の身と成らざらんが為なり」というように、仏種を断たないためとの所信を述べ、fのように、「賢哲」から添削を仰ぎ、「衆の嘲り」に対しても敢えて引き下がないという決意を見せている。本書を誘るものも、本書に従うものも、共に結縁し、お互いに引導することになれば有りがたいと編者は願っている。念のために申し添えるならば、末文のfの部分のみに関しては、『略要集』と『海道記』との関連が既に指摘されている。

『略要集』末文とそれに関連すると思われる『海道記』の文とを対照してみると、以下の表のようになる。対照表の上段は『略要集』の末文、中段には『和漢朗詠集』の古注である『和漢朗詠集仮名注』を挙げ（詩歌番号は日本古典文学大系本に拠る）、参考として下段には永済注も付け加えた。下段は『略要集』に対応する『海道記』の文である。それぞれ数字によってその対応箇所を示した。

数字は1から16までであるが、15までは、『略要集』末文から抜き出した表現である。16は『略要集』本文からの引用である。内容は四点からなっている。①1から8までは、無常思想に関するもので、②10から12までは、触事・増観思想に関するもの、③は心と境に関するもの、④13から15までは衆生を仏道に勧誘する内容に関するものとなっている。

『海道記』

1—A 情其昔ヲ思ヘバ哀ニコソ覺ユレ（一〇九頁）
B 生死涅槃猶如昨夢といへるもあはれにこそおほゆれ。

2…楊貴妃專房之寵。

◎(秋夜) 336 遅々鐘漏初長夜 耿々星河欲曙天 玄宗別貴妃 白樂天

……物語ニ曰 彼長恨歌ハ、玄宗ノ、a楊貴妃ヲ寵愛專ニシテ、國ノ政コトナカリシトテ、……即チ、帝、貴妃ヲ相ヒ伴ツテ、b馬嵬ノ亭ニ御幸ナル時、安祿、軍サヲ布シテ、貴妃、并ニ c楊国忠ヲ殺シケリ。而ニ、貴妃死シテ後、悲シノ余リニ、玄宗成都ト云処ニ在テ……昔ノ御事ヲ思召シ、慟リノ泪タ、難押マシマス。或ハ、又、霓裳d羽衣ノ曲ヲ成スト云ヘトモ……(六一四頁)

▽『和漢朗詠集』(十五夜) 336 楊貴妃帰唐帝思

3…潘安仁擲果之戲

◎(妓女) 750 容兒似舅潘安仁之外姪 氣調如兄崔季珪之小妹 遊仙囑歌序 長文成

……則天武后ノ御貞、惣シテハ天上ニ登テ天人ヲ見、仙家ニ入テ仙女ヲ見如ク……潘安仁カ外姪ト申サン……即、此人ノ母方ノ姪ナレハナリト云也。彼美女ノ名ハ、不明。(八四〇頁)

4…李將軍之武勇也
富

◎(將軍) 980 離山雲暗李將軍之在家 額水浪閑蔡征虜之未仕 菅三品

李將軍ヲハ、武師將軍トモ、又ハ李広利トモ云。彼——母ヲ虎ニ食レテ、兵ヲ具シテ山中ニ入ニ、虎臥ス。李——射之、其矢当テ深トナリ、又近付テ見ニ之ヲ、石也……『永濟注』に傍線部ナシ。(八三〇頁)

◎(丞相) 980 春過夏闌袁司徒之家雪応路達 且南暮北鄭

昨日過にしあとはけふ夢となり、今日此所をすぐる、明日いづれの所にして今はきのふといはん。誠にこれ過ぬるかたの歲月を、夢よりゆめにうつりぬ。昨日今日の山路は雲よりくもにいろ。(九四頁)

2—① 方士ガ大真院ヲ尋シ、a貴妃ヲ私語再ビ唐帝ノ思ニ還ル……今ハトテ天ノd羽衣キル時ゾ君ヲアハレト思イデヌル……彼モ仙女也此モ又仙女也……同ク別テ夜ノ衣ヲカヘス。都テ昔モ今モ、好女ハ國ヲ傾ケ人ヲ悩ス。ツ、ツシミテ色ニ耽ルベカラズ。(一〇二頁)

② 十五日、木瀬川ヲ立ツ……心中ニ所作アリ今シバシト乞請ラケレバ、猶遙ニ過行ケン、寒ニ羊ノ歩ニ異ナラズ。心ユキタルアリキナリトモ、波ノ音松ノ風、カハル旅ノ空ハイカバ物哀ナルベキニ、況ヤb馬嵬ノ路ニ出テ、牛頭ノ境ニ帰ラントスル涙ノ底ニモ、都ニ思ラク人々ヤ心ニカ、リテ……(一〇五頁)

③ c楊国忠ガ他界ニ移シ、不知人ノ恨ヲ成コトヲ(一一〇頁) 3 昔此宿ノ遊君、花齡春コマヤカニ、蘭質秋カウバシキ者アリ。良ヲ潘安仁ガ弟妹ニカリテ、契リヲ參川吏ノ妻妾ニ結ベリ(八五頁)

◎『永濟注』……マコトニ、潘安仁カハ、カタノ、メヒナルニハアラス。タ、安仁カタチスクレタリシ人ナレハ、ソノメヒニテ、ヲチニ、タリト云也。(三〇七頁)

4—A 奔箭速ニシテ虎ニ似タル石ニ中ル(七八頁)

B 朝雲峰クラシ、虎李將軍ガ棲ヲ去リ、暮風谷寒シ、鶴鄭太尉ガ跡ニ住ム(九三頁)

◎『永濟注』……下句、鄭太尉トイハ、鄭弘、字巨君、会稽山陰人也。ヒト、ナリ、孝ノ心フカ、リケリ。家ハ溪南ニアリテニ(異本、谷) カハヲワタリテ、漢(異本、溪) 北ノタキ、ヲコリテ、コレヲウリツ、オヤヤヤシナヒケ

5 陶朱之金玉之財

大尉之溪風被人知 青三品
 ……昔シ、鄭弘ト云者アリ。老タル親ノ為ニ、若野溪ト云谷ヲ渡テ、南山ノ薪ヲ取、孝行ノ志シ逐日切也。或時、山中ニテ一ノ矢ヲ得タリ……一人ノ老翁來テ、矢ヲ尋ルニ、此矢ヲ翁ニ与。其翁曰ク、此処ノ山神也ト言フ……孝行ハ神明ノ感也。孝經云、孝行ノ志、既ニ通神明云ヘリ。(八二八頁)

▽『和漢朗詠集』(雁) 33 『奔簡易述、猶成誤於下流之水急』

6 親昵之泣面。多為北芒之塵

◎(山水) 35 范蠡ハ、陶朱公カ武士ノ時ノ名也……謂ク、山ヲ望メハ、爰彼ノ千花万花ノ咲キ乱レタルハ、康伯カ旧棲ニ、仙葉ノ花ノミ残テアリシカ、咲居タル歟ト云也……范蠡ト云人ハ、釣ヲ垂テ一生ヲ送リシ也……而、煙ナトノウルライテ、波モコマカナル体 興アリト、カ、ル面白キ処ト……(七三四頁) 『永濟注』に傍線部なし

7 外人之聞名。併化東岱之煙

◎(山水) 36 泰山不讓土壤故能成其高 河海不厭細流故成其深 漢書文也

8 何朝何夕。從彼逝水

……泰山ハ、五岳ノ東岳也……微塵ヨリ起レリ。爾レハ、塵土ノツモルヲ、不厭以テ、山徳トスル也……河海トハ、内典ニハ、四大海ヲ本トシテ、衆流成 外典ニハ……謂ク、河海ハ、万水ノ流レニ依テ、深キコトヲ成ス也。故ニ、細流ヲモ不厭也。(七三二頁)

9 翠嶺風扇無妨欣宝樹之微風

10 何乍得所①觀境。徒不運心念乎……一為②練自心也……自心若正。

③万境咸歸。自心

◎(錢別) 38 楊岐路滑我之送人多年 李門波高人之送我何日 別路花飛白云詩序 以言
 楊ハ、楊朱カコト也。岐ハ、チマタ也。謂ク、楊朱カ岐路ニ哭シテ云、知ル人モ去リ、不知人モ來ル。生死無常ノ世中、不定ナルコト、此ニ見ヘタリト、哀哭シケリ(七九九頁)

リ。ソノタニヲハ、若耶溪トイフ……童ノ云ク、イトヤスキコトナリ。ワレハ、コノヤマノヌシナリ。朝ニハ、ミナミノカセヲフカセテ、フキヲクリ、暮ニハ、キタノカセヲフカセテ、フキヲクラシメムトイヒテ、シロキツルトナリテ……ソノタニノカセ、朝南暮北ニテ、フネノワタルコト、イトヤスカリケリ(二九一頁)

5 北ハ韓康独往ノ栖 花ノ色夏ノ望ニ貧ク、南ハ范蠡扁舟ノ泊、浪ノ声タノ聞ニ樂シム。塩屋ニハ薄キ煙靡然トナビキテ、中天ノ雲片々タリ……此浦ノ景趣ハ竊ニ行人ノ心ヲカドフ。

行過ル袖モ塩屋ノ夕煙タツトテ海士ノサビシトヤミヌ(八七頁)

6 此次ニ相尋レバ、一条宰相中将信能美濃國遠山ト云所ニテ、露ノ命風ヲカクシテケリ……傷哉……寿堂ノ扉、永ク閉テ北芒ノ地ニ埋ム事ヲ(一一〇頁)

7 無始生死ノ間ニ、塵ノ結縁積テ泰山トナリ、露ノ功德タマリテ蒼海トタ、ヘテ……(一二三頁)

◎『永濟注』……謂華山、首山、大室、泰山、東萊山、此五山、黃帝所常遊 与神会矣云(二〇二頁)

8 A 然間 逝水早ク流テ、生涯ハ朋レナントス(七二頁)

B ハカリキヤ、栄木風タ、キテ、其花塵トナリ、逝水ナガレ速ニシテ、其身淡ト消シトハ(一一八頁)

9 銀樹七重風、無苦ノ声ヲ調ベ(一一九頁)

10 ① A 字度浜ヲ過レバ、波ノ音風ノ声、心澄地ニナシ修スル所ハ中道ヲ教テ、論談ヲ空飯ノ頓ニ決シ、利スル所ハ下界衆生、帰依ヲ遠近ノ境ニ至ス。伽藍ノ名ヲ聞ケバ久能寺ト云(九五頁)

B 按察使光親卿……此原ニテ末ノ露本ノ滴トラクレ先立ニケリ……其時ノ発心等閑ナラズハ來迎タノミアリ……無

若邪。諸塵有滯

- 11.. 而心不孤起。必託於緣。假文助意。觀心不乱。既調散心於一境。必遂往生於三輩之業
- 12.. 念々歩々悉改三途之業
- 13.. 造次顛沛。併成九品之因

◎(雁) 雲衣范叔羈中贈 風機瀟湘浪上舟 秋雁似古人 後中書王

楚ノ屈原ト云人、瀟湘ノ浦ニ流レテアリシ、彼浦ニテ釣リヲタル、時ノ(六四七頁)

◎書陵部本『朗詠抄』……楚懷王ニ仕シオ人也シヲ、人妬テ、讒訴シケリ。王終ニ此ヲ流ス。サマヨイケル時ニ、漁夫、江ノホトリニ、釣シケルニ逢ヘリ……アザ笑テ漕去ル(三九三頁)

常ノ郷トハ云ナガラ、無慚ナリケル別カナ。有為ノ堺トハ思ヘ共、憂カリシ世カナ、(一〇五頁)

C 山重テ又重又、河阻テ復阻タリヌ。独旧里ヲ別テ、過ニ新路ニ赴ク。不知何日カ故郷ニ帰ラム。影ヲ双テ行遣ッレハ、多クアレドモ、志ハ必シモ同カヲネバ、心ニ違スル気色ハ友ヲ背ニ似タレドモ、①境ニフル、物ノ哀ハ心ナキ身ニモサスガニ覺テ、屈原ガ沢ニ吟テ、漁夫ガ嘲ニ恥ヅ、楊妓ガ路ニ泣テ、騷人ノ恨ヲイダキケンモ、身ノ譬ニハアラネドモ、逆旅ニシテ友ナキ哀ニハ、ナニトナク心細キソラニ思シラレテ

露ノ身ヲ置ベキ山ノ陰ヤナキヤスキ草葉モ風吹ツ、(八三頁)

D 心中ニ所作アリ……況ヤ馬嵬ノ路ニ出テ、牛頭ノ①境ニ歸ラントスル涙ノ底ニモ、都ニ思ヲク人々ヤ心ニカハリテ……(一〇五頁。2―②参照)

②A 南無西方弥陀観音、其時ノ発心等閑ナラズハ来迎タノミアリ(一〇六頁) B 東國ハ是仏法ノ初道ナレバ、発心沙弥ノ故ニ修行スベキ方ナリ(一一八頁) C 極楽、西方ニ非ズ、己ガ善心ノ方寸ニアリ。泥梨地ノ底ニ非ズ、己ガ惡念ノ心地ニアリ(一二二頁) D 道心ハ縦堅固ナラズトモ、慚愧ノ杖ヲ取シバリテ常ニ身ヲ誡メ、業塵ハ、タトヒ積キルトモ、懺悔ノ箒ヲ束テ恒ニ心ヲキヨメン(一二三頁)

11 此ハコレ、文ヲ用テサキトセズ、語ヲ以テ本トセズ、只境ニ牽レテ物ノ哀ヲ記スルノミ也(七六頁)

12 終ニ天使ニメサレテ地獄ニ墜ヌレバ、冥路山嶮シ、嬰兒ノ歩ニ溺テ独行……惡行恥ヲ露ス鏡ノ中ノ影、白業陳ジガタシ札ノ上ノ文……我等前非コ、ニ謝セズハ、後悔又イカミセン。心アラム人誰力悲シマザランヤ(一二二頁)

13 A 東土ニハ、縦勇士永ク一期ノ寿木ヲ切ルトモ、西

14…必遂往生於三輩伝
苦海之船筏……

15…為不成斷種身也
16…凡生死無常者。不
損貴賤上下。……

而世人之愚也。
於老少不定之境
《仏全》一六六頁

『略要集』1の「つらつら過去の年月の夢の如きなるを顧みれば」と『海道記』の文を比較すると、「情」という言葉使いや、「夢」の如しである「年月」「歲月」という考え方は、『略要集』と相通じている。そして、『海道記』の作者は無常思想を旅と結びつけているのが特徴である。

『略要集』の2から7までの文に於いて、無常の体現者として六人が挙げられたが、2の楊貴妃、3の潘安仁、4の李將軍、5の陶朱公等四人は、皆『海道記』に取り入れられている。6の北芒、7の東岱もそれぞれ『海道記』の6と7とに対応している。

ただ、ここに指摘しておきたいのは、これらの人物についての具体的表現は、『古注』を媒介にしている可能性も考えられるということがある。例えば、2—①のaの楊貴妃、dの羽衣、②のbの馬嵬ノ路、③の楊国忠等、3の潘安仁についての話、4のAの

刹ニハ、聖衆定テ九品ノ宝蓮ニ導キ給ラン……思ヲ恋ン人ハ、追福ヲ九品ノ道ニ訪フベシ（一一〇頁） B 覺路ノ蓮ハ必九品ノ露ニ開キ置ラン（一一八頁） C 是ニ依テ九品覺王ノ善政ヲ垂ル、一念奉公ノ輩併平等引摂ノ賞ニ預リ、諸大薩埵ノ會議ヲナス（一一九頁） D 九品ノ都コソイマダミネバ恋シケレ。恋シクハ誰カマイラザルベキ（一二二頁）

14 二脇ノ片座ニハ、三十三身ノ尊大悲弘誓ノ網ヲ垂テ苦海ノ沈物ヲスクフ。故ニ三世仏ノ濟度ニモレタル五逆ノ罪人モ、願海不捨ノ船ニ棹テ彼岸ニ度リ（一一九頁）

15 仏種胸ニ埋レリ。終ノ時ニ臨テ宜ク萌スベシ（一二三頁）

李將軍のエピソード、Bの李將軍ガ樓、鶴という表現、5の范蠡についての「煙」という語や、韓康の樓についての「夏ノ望」という語などを見ると、少なくとも『海道記』の作者は『古注』の作者と同様な教養圏にあることが分かる。或いは『海道記』の作者は『略要集』の末文に啓発を受けながら、具体的な表現は『古注』を参照するという手法を取ったのかもしれない。『古注』を見ると、4の李將軍と韓康は親孝行のイメージを持っている。このイメージは『海道記』の末文にある「我聞、仏神ハ孝養ノ為ニ擁護ノ誓ヲ發シ」と重なっている。更に、『海道記』7の文では、作者が死者の魂が集まるという『略要集』の「東岱」のイメージから、『和漢朗詠集』の499番の塵も積もれば泰山となるという哲学的なイメージの泰山を経て、「塵ノ結縁積テ泰山トナ」るという仏教的なイメージを持つ泰山へと書き換えを行ったのではない

かと思われる一面がある。又、『海道記』5の表現を見ると、作者は一見、高志山を下った時の景趣を描いている様に見えるが、この景趣にある、海士が関心を示さなかった「塩屋ノ夕煙」は、『古注』の「煙ナドウルヤイテ」の「煙」と『略要集』の「東岱の煙」と重なっているのではないだろうか。

8について見ると、『略要集』は上記の文末aの一連の無常現象の締め括りとして「逝水」を挙げていたが、その語は『海道記』の8のAとBにも現れている。『海道記』の作者は8のAの「逝水」を自身に結びつけ、自分の生涯は「身運ハ本ヨリ薄く、五旬ノ齡ノ流車、坂ニクダリ、鏡ノ影ニ対居テ知ヌ翁」(七二・七三頁)と、「食泉の蝦蟇と成」(七二頁)って、「山水齡流テ俄ニ泉ニ帰」してしまつた(一二二頁)という、懷才にして不遇・貧困・不如意の人生だと述べている。

『海道記』8のBの「逝水」には『略要集』6の「北芒之塵」が生かされていて、承久の乱という世の中の出来事が映し出されている。その「逝水」に、「波ノ声鳴咽シテ哀傷ヲヨス」(一一〇頁)声が聞こえ、「流ユキテ帰ラヌ水ノアハレトモ消ニシ人ノ跡トミ」(一一〇頁)え、「無常ノ郷トハ云ナガラ、無慚ナリケル別」(一二〇六頁)れた面影、「思キヤ都ヲヨソニ別路ノ遠山ノヘノ露キエ」(一二一頁)た、中御門中納言・藤原宗行、按察使・藤原光親、前左兵衛督・源有雅、高倉宰相中将・藤原範茂、一条宰相中将・藤原信能などに対する同情が反映されている。『略要集』の6の「親昵之並面」は、『海道記』の中では、承久の乱による犠牲者と転用されていたのではないだろうか。ついでに触れるが、

対照表の10の①のCの『海道記』の文に出ている屈原、楊妓兩人物は、『略要集』にはないが、作者がこの二人を取り入れた理由、つまり、「境ニフル、物ノ哀」を覚えたわけは、『古注』にある「生死無常ノ世中」と、屈原の不遇の身の上への共鳴によるものかも知れない。これと対照表最後に挙げた『略要集』16の文とを合わせて見ると、その「生死無常」「老少不定」も実は一つの境界なのである。

以上、『海道記』の無常思想をめぐって、1から8までを通観してきた。次に9について比較する。『略要集』の「宝樹之微風」等の表現は、浄土世界の様子を描くもので、『海道記』の「銀樹七重風」と全く同じ表現ではないが、その浄土世界の風景の表現の原典は『略要集』の末文にあるのではなく、その第三章の「極楽の依正の功德を歎ず」にあるのである。紙数の都合により、両者の比較については稿を改めて詳細に論じたいと思う。

続いて、10から12までの文について比較する。『略要集』の10の①の「境を観ずる」という思想の影響を受けてか、『海道記』の作者は、A「遠近ノ境」、B「有為ノ堺(境)」等、「囂中ノ景趣」でない「境」のことを強く意識している。そのB、C、Dと11の「只境ニ牽レテ」の境の中身は無常や地獄の境界と関わっている。又、Aの宇度浜で語つた「中道ノ教法」、「空仮ノ頓」等に関する「遠近ノ境」については、『三十四箇事書』や、『海道記』と同じ時期、同じ天台本覚思想の『閑居友』の文を見ると、当時の天台仏教界では、三観の仮諦を眼前の境界、いわば、近境と見ているようである。『略要集』の10の③に「万境、咸帰す」と、11

に「散心を一境に調う」と、「万境」と「一境」があるが、『海道記』のB、C、Dと11の境はその「万境」に当たり、Aの空・仮・中に關する「遠近ノ境」は、その「一境」に相當するのではないかと私は考える。

『略要集』10の②の「練自心」については、編者はその重要性を説くと同時に、11で、「観心」の手段として、「文をかり」ることを強調した。又、9の極楽浄土への往生、13の「九品之因」を成すには、10の様に「境を觀じ」、「自心を練」つて、12の「三途之業」を改めることが必要だと説教している。それに対し、『海道記』のほうは「境を觀ずる」の手段を旅と具現化し、「心念を運び」、「自心を練る」方法を②のA、Bの「発心」、Cの「善心」と、Dの「心を清める」「潔心」と具体化し、発心すれば、阿弥陀如来が極楽に迎えてくれるが、悪念を起せば、地獄に落ちると、「自心を練る」重要性を訴えている。そして12の様に、『海道記』の作者はその地獄の悲惨さをリアルに語り、反省の必要性を強調している。『略要集』の「誠を励まし、事に触れて観を増」し、心を「正」すべきという仏教観は『海道記』に投影されていることが分かる。

更に、『略要集』11の表現のように、「散心を一境に調うれば、必ず往生を三輩に遂げん」という編者の編集意図も、『海道記』の11の「境二牽レテ物ノ哀ヲ記スル」というところに反映されている。

最後に、13、14と15について対照すると、『海道記』の作者は、『略要集』の第二の動機「他人に仏道を勧める」ことを疑いなく

意識していることが分かる。『略要集』13に出ている「九品の因を成ぜん」の「九品」という言葉は、『海道記』の13Aの文に四回ほど使われている。続いての14に於ける『略要集』の「苦海」「船筏」「三輩」などの語句も、そのまま『海道記』で生かされている。更に『略要集』15の「断種の身とならざらんが為」という決意に対し、『海道記』の作者は、「仏種胸ニ埋レリ、終ノ時ニ臨テ宜ク萌スベシ」と、その確信を表明しているのである。

四 結 び

以上、『海道記』の生成、作者の執筆動機と『略要集』の編集意図との関連について検討を進めてきた。右の比較考察に基づいて、『海道記』の執筆過程を想定してみると、作者は『略要集』の末文に啓発を受けながら、具体的な表現は『和漢朗詠集』古注から縦横に採用するという手法を取ったのではないかと考えられるのである。

執筆動機について言えば、作者は、様々の境界に触れることを結縁の契機と見、心の本質を見つめていたのである。そこで、冒頭に述べた問いに答えるならば、『海道記』における第二部の紀行と、第三部の仏者としての求道の叙述は、全体の構想に基づいて綴られたものであり、その構想は、明らかに『略要集』の末文に影響を受けて成ったものだと考えられるのではないだろうか。

更にまた、景趣と境との関係について述べると、『略要集』における「瑠璃為地。金繩界其道」と、『海道記』の「観夫ケガラハシキ浜路ヲ過行ダニモ、白砂猶ヲモシロク見ユ。マシテ極楽靈繩

ノ道コソ思ヤルモユカシケレ」と、傍線部の表現が対応している様に、『海道記』の作者は「境を観ずる」の手段を旅と具現化している上述の様に、東海道下向の旅を、極楽霊繩の道とも見なし、旅路で見た自然風景を観察し、「ケガラハシキ浜路」から「ヲモシロ」い「白砂」という本質を見つめ、そこに極楽浄土を感じている。つまり、旅路で触れた「景趣」を事理相通するという悟りの「境」地に昇華するのである。このプロセスは、前述の『観心略要集』の「触事」「増観」のプロセスに当てはめることができる。

以上指摘したことによって、冒頭挙げた先学の視点に対して、修正を加えると、『海道記』の作者は旅の目的を「触事」「観境」「結縁」「増観」と設定し、それによって、「自分の心を練」りあげ、「他人」をも極楽浄土に「誘」おうとする。その「触事」「観境」「結縁」には「心を練る」「結縁する」「観を増す」という作者の「愚懷」「志」が込められているのであり、「結縁・済度」という利他の面も含まれているようである。そもそも『海道記』を書く行為そのものも、仏種を断たためにおのれの心を観ずるためのものであり、それによって、文章を以て衆生である「読者」を仏道に結縁させる行為でもあったわけである。

注(1) 三木紀人『古典文学と仏教』(『日本文学と仏教』岩波書店 平成

7)『紀行文学』『海道記』の諸側面 二二七—二五六頁

(2) 西村岡紹、末木文美士『観心略要集の新研究』(百華苑 平成5・3)

(3) 松本幸至「中世の日記紀行」(『物語日記文学論考』桜楓社 昭和

59)、小林智昭「海道記を巡る問題」(『文学』昭和41・11)、西田正好「仏教と文学」(二〇頁)、玉井幸助『日本古典全書』(三一頁)、小林保治「海道記」の成立」(『早稲田大学教育学部学術研究国語国文学編』昭和45・12)、井出敦子「海道記」第三部論——意味付けされる自己の旅——(『国文学研究』第百十七集 平成7・10)

(4) 玉井幸助『日本古典全書』『海道記』を始め、野呂匡「海道記新注」(芸林舎 昭和52)、江口正弘「海道記の研究」本文篇・研究篇(笠間書院 昭和54年)、武田孝「海道記全釈」(笠間書院 平成2年)、新日本古典文学大系「中世日記紀行集」(岩波書店 平成2)、新編日本古典文学全集「中世日記紀行集」(小学館 平成6)、佐野隆三「中世自照文芸研究序説」(平成6)

(5) 石田瑞磨「中世文学と仏教の交渉」『海道記』の宗教(春秋社 昭和57・7)は仏教法語について十例を挙げたが、中に、「観心略要集」と関わりがあるのは、五箇所である。佐野隆三「中世自照文芸研究序説」(注4)は「観心略要集」との関連があるものを五例挙げ、三例は注(2)と重複(二二五—二二六頁)。しかし、筆者の調査では、仏教用語など両者の対応箇所は「観心略要集」末文以外に三十箇所以上にも上る。

(6) 事・理・境などの仏教用語については紙幅の関係で深く立ち入りをしないが、「事」とは、様々の因と縁が結び合って生じたもの、凡夫等の迷情によって見られた差別的現象のことである。「摩訶止観」序章に「天台は南岳より三種の止観を伝えたまなり。一には漸次、二には不定、三には円頓なり……不定とは、別の階位なり、前の漸、後の頓に約して更に前、更に後、互いに浅、互いに深、或いは事、或いは理なり。……」とあり、第三章に「入るところの空は、空即ちこれ理なり、智よく理を顕わすは、即ち親達の義なり……縁にしたがひ、境に歴て心を安んじて動ぜざるを、随縁方便止と名づく」とある。又、無常に関する「分段有為ノ理」(『海道記』が

『観心略要集』の「分段有為ノ境」と対応している。当時、「境」を「理」と結んで考え、事理が相通すると認識されていたことが分かる。更に、鴨海漏の記事（『海道記』八二―八三頁）における「小蟹」についての描写は『摩訶止観』や『天台本覚論』における畜生道、魔事境、真如観、煩惱境と一致している。

- (7) 『和漢朗詠集』との関連については、下西忠『海道記』語彙考(一)、(二)、(三)、『国語国文』昭和59・12、「中世文芸論稿」第9号、昭和60・9、「国語国文」昭和61・12、等参照。『和漢朗詠集』古注との関連についての私なりの考察は、別の機会に譲りたい。

- (8) 書院部本系朗詠注は『和漢朗詠集古注釈集成』（大学堂書店）に

拠った。

- (9) 浄土風景の描写は『往生要集』と『観心略要集』が共通な表現が多いが、『海道記』の「七宝ノ高台」などの語は、『観心略要集』にしかない「七宝山」などに対応している。

- (10) 『三十四箇事書』（一二五〇年前後成立）に「仮詠は眼前の境界、諸法の森羅、自爾本来不生の体なり。空中とはこの諸法は互に混合して差別なしと云ふを、空といふ」（日本思想大系『天台本覚論』一七七頁、『閑居友』六に「仏の御国に境近き国」（『新日本古典文学大系』40「三七五頁」とあり、『海道記』と同じ認識。

新刊紹介

早稲田大学大学院文学研究科
日本文学専攻中世散文研究室編

『東京大学文学部国文学研究室蔵

『保元物語』——翻刻と研究——

かつて久保田淳氏によって紹介されたものの、二十年近く具体的な調査・研究が行われてこなかった。東京大学国文学研究室蔵『保元物語』上（略称東大国文本。下巻は欠）に、初めて翻刻を行い、更に他諸本との比較・対照に基づいた考察篇、それに『保元物語』研究史を加えたのが本書である。翻刻・調査・研究は、目下力教授のもと、目下研在籍の院生が取り組んだ。本書によると、東大国文本は、京図本を始め、数種の『保元物語』を基に、かなり

独特な改作が加えられたものである。諸本との影響関係は相当に複雑で、東大国文本独自の部分も注目される。本テキストが今後更に詳細に検討されることで、『保元物語』の流動・展開に、新たに貴重な問題提起がなされるであろうことは間違いない。

（平9・10 私家版 A5版 八五頁 実費一〇〇〇円）

〔秋山寿子〕

梶原正昭著

『鹿の谷事件 平家物語鑑賞』

本書は、長年にわたり大学やカルチャー講座などで『平家物語』を魅力的に講じてきた著者によって、新たに書き下された『平家』鑑賞の手引き書である。

まず巻頭で、歴史文学・軍記物語・語り

ものという三つの側面から、『平家』を読み解く上で鍵となる計十項目の着眼点を示し、物語鑑賞のための総論を述べる。そして物語の前段（巻一―三）を彩る鹿の谷陰謀事件を中心とした九章段を選び、詳細な解説によって作品の背景や含意を鋭く読み解いていく。そこには地図・系図・写真などの視角資料を多く盛り込むなど、一般の読者に親しみやすいようにとの配慮が細部にわたって施されており、読者は実際に著者の講座を受講しているかのような感覚の中で物語を深く理解し、味わうことが出来る。

また各章段の後には「物語の舞台」という作品の背景や舞台になった場所・遺跡の解説の欄が設けられ、実地に踏査する際にも大いに参考となる。

（平9・7 武蔵野書院 A5判 三一六頁 二四〇〇円）

〔川鶴進一〕